A dimension tripper.（最強刻印パイルバンカー）

まめ太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｄｉｍｅｎｓｉｏｎ　ｔｒｉｐｐｅｒ．（最強刻印パイルバンカー）

【Ｎコード】
Ｎ３２５８Ｖ

【作者名】
まめ太

【あらすじ】
これは、２ちゃんねるにある、【小説家になろう・お題スレ】で誕生したストーリー。根底に流れるテーマは、戦闘力５３万・ハイパー邪気眼小説。最強刻印パイルバンカーの行方は。ほぼ超絶チートなラスボス・時空要塞グランドサザンクロスの全貌は。緋人は妹を、そして奪われた幼馴染の巴を救い出せるのか。
なにより作者はお題のスベテを消化しきれるのか！？

「興味ありましたらお題スレまでおいでませ～。」絶賛宣伝中。

刻印

目の前に、車のヘッドライト。真っ暗闇の中、突っ立っていた俺。眩しくて目を閉ざした俺は、次の瞬間には跳ね飛ばされたんだと思う。急ブレーキの音が聞こえて、どすんと重たい衝撃が腹にめり込んで。

意識を失った。

「お兄ちゃーん、」

妹が呼んでる。今日は動物園に連れてく約束してたんだ。

けど、なんとなく、何かが足りない感じがしてる。何か、俺は大事なことを忘れてるんだ。

俺が事故に逢ったのは半年くらい前の話で、まぬけな事に、自分の両親の乗る車に撥ねられて入院した。親父いわく、いきなり俺が飛び出してきたって話だった。

俺はそん時に記憶を無くしてしまって、時々、突拍子もない事を話したり、大事な事をすっかり忘れてしまってる、らしい。自分じゃよく解からん。

名前は神内緋人（かみうち ひのと）、歳は17。妹の名はユキ。ほれ、こんくらいなら覚えてる。日常会話もオケ、学力の方もまったく支障なし、けど色々都合の悪いこともあり。

「にいちゃん、ボケッとしてたらまた轢かれるよっ！」

うるせぇ、厭な言葉ばっか覚えて来んな、くそガキ。

妹のユキは幼稚園の年中さん、5歳になって後輩が出来たもんで、少しばかりマセてきた。知ってる？幼稚園って4歳から6歳までで、年少、年中、年長さんに分かれてるんだってさー。豆知識だ。

ユキはコアラがどうとかいう歌を歌いながら上機嫌で隣を歩いている。今日のためにと母さんに買ってもらったピンクのワンピースを着て、にこにこしながら俺の手を握ってくる小さい手。
妹ってのは、可愛いもんだよな。
栗色の髪が、朝日を受けて天使の輪っかみたいに輝いてる。俺たち兄妹は日本人離れした淡い栗毛とブラウンの瞳だったから、結構目立つんだ。早朝の河川敷、市民の散歩コースにもなってるこの道をまっすぐに行くと、駅に出る。遠回りだけど小さい妹と一緒だし、運動がてらこっちを選んだ。最短コースは車が多くて危険だから。
さすがに早朝だけあって、河川敷には人がほとんど見当たらない。
「お、ひーちゃん、おはよう。」
「おはようございます。」
「おじさん、おはよー！」
ジョギング中だった近所のおじさんと出会う。ユキはぴょこんと手を挙げて、大きな声で挨拶をした。俺の名前のヒノトという響きは、どうにも語呂が悪いらしく、まともに呼ばれた試しがないんだ。
おじさんはその場でランニングマシーンみたいな動きになった。
「ユキちゃん、これからお出かけかい？　いいねー、」
「うん！　ひー兄ちゃんと動物園行くの！　兄ちゃんが迷子にならないよーに、ユキがお手て繋いどいたげるの！」
偉いでしょ、と胸を張るユキの頭をおじさんが撫でてく。
「そーかい、良かったなー。じゃあ、しっかり連れてってあげるんだよ！」
「うん！」
おじさーん、連れてってもらうのは俺のほうなの？　がっくりと脱力してる俺を無視して、おじさんは軽く手を振るとまたジョギングを再開した。
「おじさん、またねー！」
遠くなるまで手を振って、ユキが俺の方を向いた。小さい手をしっかりと握り直して、と。

「じゃ、行くか。」
「うん！　しっかりお手て繋いでないとダメですよ、ひー兄ちゃんさんっ、」
幼稚園で散々言われてるらしい。俺に返して得意顔の妹に思わず苦笑を洩らしてしまう。
朝の薄い光が河面を照らして、細かい波がキラキラと輝いている。車の多いバス通りと違い、空気まで美味しく感じられる。夏ともなれば、鮎を目当ての釣り人が竿を振るっていたりして、けっこうな風物詩だ。魚を魔法で跳ね上げるのは邪道だと思うけど……え、なに、魔法？　また突拍子もない妄想が沸いてきた、大丈夫かな、俺。
魔法だとかシステムだとか、俺は漫画や小説で読んだ世界と現実を時折ごちゃ混ぜにしてしまうんだ。精神科の病院に罹っていて、事故の後遺症でそのうち治まるだろうと言われているが、少し不安になる。

「ねー、ひー兄ちゃん。」
「どうした、疲れたか？」
突然、妹が立ち止まったもんだから、危うく繋いだ手が外れるところだった。
ちょっとさすがに距離があったかな、５歳児っての忘れてたかもな。
「あのね、ユキのお手てになんか書いてあるー。」
え？
差し出してきた小さな手の甲には、ぼんやりと光を放つ紋章が浮き出ていた。
なぜだろう、俺はその紋章が何なのか、知っている。
『妖精の刻印』だ。
いや。
唐突に、すべての記憶が蘇った。

自身の手をおそるおそる、日にかざす。
俺の手の甲にも、くっきりと『刻印』が浮き上がっていた。
『玉虫の刻印』

「きゃあ！」
「うわ！」
突然の突風に、思わず顔を庇って腕を上げた。ユキの手を強く握る。時空嵐だ、強制的に開かれた異次元空間から、エネルギー波が風の形をとって吹き荒れているんだ。
奴等が追ってきた。……まずい、ユキを逃がさないと。
「ユキ、絶対に放すなよ！」
慌てて俺はユキを抱きかかえて奴等に背を向けた。二人で跳ぶのは初めてだが、幼児程度なら大丈夫だろうと判断した。はっきり言って勘だ。
飛翔準備、座標を確認する暇はない、とにかく障壁さえ避けりゃいい！
「また逃げるの！？」
鋭い声が覆いかぶさる、女の声。いや、よく見知ったアイツの声だ。
「巴、」
「兄ちゃん、こわい！」
今は構ってられない、妹まで狙われる。奴等は俺を追ってきたはずだ、ユキの刻印に気付かれる前にここを離れないと。
俺の刻印の能力は、『時空移動』だ。あらゆる時、あらゆる空間へ飛翔する。この能力を使って、俺は奴等から逃げ回っていたんだ。突然奴等が現れた、あの日からずっと。
巴、すまん、守ってやれなかった。

脳裏に浮かぶ時空螺旋、幾重に重なる円盤模型はそのすべてが異なる宇宙。平行同一座標に位置するそれぞれが別の世界。この世界

にマーキング、目標空間座標確定。
あまり離れすぎない場所がいい、平行宇宙の似た世界、分厚い本の中の適当に開かれたページへ。幾つかの世界を飛び越えて、奴等の居ない世界へ。
今、俺の脳裏には二つの世界が映し出されている。現状、目の前に広がる光景と、転移先の異なる時空世界。その世界でのこの場所は、整備されたアスファルトの道ではなく、無造作に木々が生えている。遊歩道は少し先で途切れているらしいな。着地点をずらすか。このままじゃ木にめり込む。
障壁を視認、ジャンプ。
一瞬、振り向いて見てしまった。空間に開かれた虹色に輝く亀裂から、這い出してくるおぞましいバケモノ達。半分機械、半分はむき出しの肉片、グロテスクな敵の尖兵たち。
その先頭に立っていた女は、俺がよく知る女だ。魔法世界のそれのような、よく見れば機械でデコレーションされたおぞましい鎧を装着している。いつも一つに纏めていた黒い髪は今は無造作に風になびいて、彼女の輪郭を朧げにする。無表情な顔、意思を奪われた濁った瞳。
御手塚巴（みてづかともえ）、……俺の、幼馴染だ。
あの日、奴等に捕まった。
以来、俺を殺すために追いかけてくる。

刻印（後書き）

妖精な妹、刻印、せんとう妖精ユキちゃん、完了……！

追憶

そうだ、思い出した。

俺は異世界からやって来たんだ。こんな風に、次元を渡って。

瞬間的な浮遊感と、水に潜ったような圧力、耳の奥にじんとくる感覚……。すべて、覚えてる。思い出した。馴染み深いこの感覚。俺は幾度となくトリップを繰り返して、あらゆる時空を逃げ回っていたんだ。奴等から。

奴等の正体は知らない、解からない。

しつこく俺を追いまわし、刻印所持者を探し回っているらしい事くらいしか。

この刻印にしても、何なんだかさっぱり解からない。これが浮かび上がって間もなく、奴等に追われるようになってしまったから。

トリップ開始同様、唐突に異界へ出る。ぶちん、と何かが引き千切れる音と微かな振動。魂が揺さぶられて肉体とブレを起こすような、と言えば解かるだろうか。とにかくこの瞬間はけっこう気色悪い。

着いてすぐに、俺は、しっかりと腕に抱いた妹のユキを確認した。髪の色が目に飛び込む。震えている身体の感触が……怖かったんだな、ごめん。巻き込んで。

なんとか奴等を振り切った。ここは、異変が起きていない世界だ。元居た世界がどうなったかは、あまり考えたくない事柄だけど、対象の俺が逃げたことで奴等も長居はしないだろう。すぐに俺を追って、あの世界から移動するはずだ。以前居た世界に舞い戻って確かめたこともある。破壊の程度はその都度で違っていた。

恐怖のせいで、妹はずっと泣きとおしていた。俺も、まだ心臓がばくばくいってやがる。

しばらく身を隠さなくちゃならないな。そう、俺があの家に居た

のも、元はと言えば身を隠すためだったんだ。半年も居座るつもりなんかなかった。
「に、いちゃん……、あれなに？　いっぱい、ヘンなのが居た……」
「大丈夫だ、ユキ。もう居ないから。」
ぎゅっと俺の服を掴んで顔を埋めていた妹が、俺の答えに顔を上げる。おそるおそる、首を回して周囲を窺って、ようやく安心したように強張った腕の力を抜いたのが解かった。
妹は、別の世界へ来たんだなんて事は知らない。後で適当に誤魔化して、時間を置いて元の世界へ戻らなくちゃな。
「怖かったー……」
「どっか行っちまったよ、ユキ。さ、動物園に行くか、ちょっと遅くなっちまったけど……」
幼児ってのは、案外立ち直りが早いもんらしい。すぐにユキは俺から離れて、一人で歩き出した。奴等に遭遇しただけで、そこまで恐れるってのもおかしな話だしな。奴等はまだ凶悪さの片鱗も見せてない。

元々居た俺の世界では、何百人もが犠牲になった。俺がぐずぐずしてたせいだ。俺の両親も、知り合いも、駆けつけた警官や軍関係さえも、奴等には蹂躙されるだけだった。
魔法と科学が混在する、この世界よりもよほどに個人戦闘力の高い世界だったのに。
為す術もなかった。
奴等とやり合える力は、俺にはない。だから、逃げ回るしかないんだ。ユキの刻印は気になるけど、きっと気付かれてはいないはず。元の世界にユキを戻して、俺が消えれば奴等の目は誤魔化せる。きっと。
そうだ、元もとの俺には、妹なんて居なかったんだから……。
「ユキ、あんまり先に行ったら危ないぞ、」
先へ先へと急ぐ妹。きっと、この場所に長く居たくないからだろ

う。強がってるけど、やっぱり奴等は初対面だとかなりキツイ印象だよな。
何も起きなくて良かった。奴等に攻撃される前に逃げて、正解だった。
「ユキ、」
もう一度、呼んだ。

突風が。
風圧で動けない俺の横を、体重の軽いユキが吹き飛ばされて転がっていく。まさか、こんなに早く奴等に追いつかれるなんて、そんな馬鹿な、
ちくしょう、ユキ！
振り返ったが、妹の姿は見えなかった。慌てて探索系のスペルを発動する。脳裏に浮かぶ風景はネガポジで逆転、真っ黒に染まる景色に白い網が被さるイメージ。点滅が妹の現在地点を示す。はずが。
「見つけたわよ、」
声と同時に超高圧の光の粒子が襲い掛かる。エネルギー弾。
なめんな、次元転移の渦を召喚、凶悪な光の束を呑み込ませた。次元系なら、俺は詠唱が要らない。この刻印の力が被さるから。通常の魔法攻撃はすべて無効だ。
突風は止まない、薄く開いた両目の隅で敵の尖兵が続々と異空間からなだれ込むのが見えた。まずい、ユキを見失ってしまったのに、このままじゃ逃げられない。
二つ以上の魔法スペルを発動するために、探査系の威力精度は格段に落ちた。
自身の意志を奪われたまま、幼馴染の巴は俺に攻撃するための魔法を、スペルを詠唱している。特大のをお見舞いする気だ。くそ、ユキ！
グロテスクな尖兵どもは、もはや人間なんかじゃない、獣のように四つんばいになって、がさがさと蠢いている。四方を囲まれた。

生皮を？いだような細い四肢に絡みつく機械の部品が醜悪だ。
スペルキャンセルの呪を口の中で転がしながら、俺はせわしなく周囲に目を配る、妹の姿を探す。
「にいちゃん！」
あらぬ方角から、悲痛な叫びが上がって。
ちくしょう、あの時と同じだ、巴が奪われたあの時と！
巨大なアームが時空間の狭間から伸びて、尖端が十字に切り開かれる、そして、現れた空洞がそこいらの人間をない交ぜにして吸い込んでいくんだ。巨大なバキュームホース。まざまざと、思い出される。
この世界、この場所には俺たちの他、人が存在しなかったのは幸いか。けど。
「にいちゃー！」
「ユキ！」
ユキが、吸い込まれた。

「アイシクルスピア！」
詠唱の完了した高次魔法が発動する、俺も負けじと解き放つ。
「シールヴォイス！」
高圧の水粒子で出来た槍、馬鹿デカいそれをさらにデカい音波の塊で迎え撃つ。相殺。
まともに相手なんてしてられるか、こっちを向いたアームから逃れて、俺はまた時空を飛翔した。

襲撃

なんの関係もないはずだったのに……！

ユキ……！

ジャンプした先の世界では、河の中だった。河川の横幅が違う、浅い瀬に勢い余って放り出された俺は、まともな受け身も取れずに無様に転がる。派手な水飛沫が散った。

多少のことはいい、撒いたか！？

亀裂が走る、何もない空間、青空の片隅からまっすぐに一文字に切り裂かれるこの世界。次元の壁。機械のアームが不気味なモジュール音を響かせ、うねる。巨体がその向こうに僅かに覗いている。

来たばかりで追いつかれた、どういう事だ！？

飛翔した時空の先で、僅かな時間を置いただけで再び追いつかれた。なぜだ、こんな事なかったのに。

くそ、転移軸変更、同じ時間帯がダメなら、未来へ跳んでやる。

ついて来られるもんなら、ついてきやがれ！

何処とも知れない世界の、何時とも知れない時間。

大地はひび割れ、見渡す限り何もない、何も存在しない世界に来た。荒廃した未来か。

何をどうすりゃこういう未来になるのか、そんな事までは解からない。別に俺は万能じゃない。危険そうだから、一応身体を守るためのシールドは展開しておいた。核の嵐で崩壊なんて場所なら洒落にならないから。赤茶のみで描けそうな風景はとてもマトモだとは思えず、用心に越したことはないだろう。

それでも、奴等が居ないだけで俺にとっては随分マシなんだけどな。

なんにもない大地に腰を下ろして、ようやく俺は一息吐くことが出来た。
さすがの奴等も、過去や未来の彼方へ跳ぶなんて芸当は出来やしないだろ。負荷が大きいなんてモンじゃないからな。たったの一瞬で時空螺旋の階層を転移するってのは、実際には時間と空間の圧縮によって行われる。跳ぶ側から見た例えで言えば、壁を突き破るってことだ。
移動する階層が多くなればなるほど、圧縮率が上がり、突破の負荷もデカくなる。俺の、この刻印の力があってこその芸当だ。魔法でもこんな事が出来る奴は一握りだろう、とてつもないパワーが必要になってしまう。膨大な魔力を消費するってことだ。空間の壁ってのは、そのくらい、頑丈に出来てる。
簡単に言えば、の話だけどな。原理だとか、そんなモン、俺が知りたい。

座ったままで、俺はしばらくの間、眠り込んでいた。防護シールド魔法を掛けたまんまだから、大して回復したようにも思えないが、気分的には随分マシになった。
俺が元々居た世界には、普通に魔法があったし、誰でもある程度は使いこなせていた。だからと言って、俺のこの能力は異常だ、自分で解かる。それもきっと、この刻印のせいなんだ……。
この能力は、魔法の定義さえ超えているんだ。これは、『神の領域』に含まれるはずなのに。なんで俺が使えるのかが、解からない。
薄い闇が広がり、赤茶けた景色はどす黒い影に半分飲み込まれている。
一度、元の世界に戻ってみるか……。もしかしたら、ユキが戻ってるかも……いや、それは望みが薄いことくらい解かってる。でも。一縷の望みってわけじゃないけど、確認だけはしておこう。無駄だと片隅では思っていて、気が重いなんてもんじゃないけど。
時空螺旋展開。

イメージする、先に印しておいたマーキングを探し出すのは少しばかり骨が折れる。
延々と続くかに見える二重螺旋はまるでＤＮＡ配置図のようだ。時空螺旋は一本じゃない、途中で分岐したものを合わせて、奥行きも定かでない数が延々と続いていくんだ。操者である俺にすら、その全容は見えない。数限りなく存在する『可能性』と『結果』が螺旋を描いて繋がっているんだ。
幾度となく転移を繰り返した俺は、もう本来の俺が存在した宇宙へは戻れない。そこが何処にあったのかなんて、もう解かりっこないから。
さっきまで居た世界ならまだ大丈夫、サーチ可能だ。……戻ってくれ、ユキ。
あった。
マーキングした世界、点滅する階層断面の位置を今度は正確に割り出して座標を確定する。
時空転移、ジャンプした。

奴等に襲撃された直後の世界へ跳んだ。
とっくに奴等は姿を消し、戦闘の余波で破壊された堤防の一部となぎ倒された木が残っているだけだ。転移してから五分後の、同じ世界の同じ場所。何かが引き摺られたような後が残っているが、これはあの機械アームの摺れた跡だろう。じっくりと見てみれば、どんだけデカい奴なのかと思う。黒く焦げたような跡は少し地面を抉り、その幅は車より大きくて。これが、アームの一本に過ぎないんだ。
さらに転移、時をおかずに家の裏手へ移動した。外壁とブロック塀の間の狭い空間に出る。誰かに目撃なんてされたら厄介だからな。
それから、本題を確かめる為に更なる転移。マーキングした先の、さらに一週間後へ。

日曜日のはずなのに、家は静かだ。……やっぱり、駄目だったのか。

物陰に潜みながら覗いたリビングの様子は、俺の期待を完全に打ち砕く風景だ。薄暗いなかで明かりも点けないままの室内。ソファに腰掛けた両親の沈痛な面持ちを見れば、だいたいの想像は付く。

この静けさ。

妹は……、ユキは奴等に攫われた。

索敵

俺は知ってた。
この世界の俺が家出してしまって行方不明になってる事を。この世界を含んで隣接する幾つかの世界で、俺は同様に些細な理由で家を出て、戻っていないんだ。
だから、何食わぬ顔で家に入るつもりで、あの夜。転移したところに、両親の乗る車が突っ込んで……いや、車の目の前へ俺は転移してしまったんだ。油断して。
生きてく以上は金が要る、だから幾らか纏まった現金を手に入れたら立ち去るつもりだった。記憶喪失なんてモンにならなきゃ、ここに長居はしなかったし、ユキだって……。
ちくしょう、

この世界は俺の居た世界じゃない。だから、この世界の俺は別に居る。それは俺であって、俺じゃない。ここは俺の世界じゃなくて、ここの俺は俺じゃないんだ。ドッペルゲンガー。
いつも、だから俺は身を隠して一つの世界には長居しなかった。
記憶さえあれば。
こんなヘマしなかったのに。

ぞわり、と肌を舐めるような悪寒が走った。空間魔法の一つ、索敵系の魔法を掛けてあったのが、作動したんだ。網の目のように周囲に張り巡らせ、生命反応や障害物、罠を見つけるための魔法だが、俺の場合は通常より範囲が馬鹿デカくなった。この街一つがすっぽりとレーダーに収まっている。刻印の関係だ。新たな敵は街外れに出現したらしい。突然空間に現れるから、すぐに解かる。
俺は急いで家を離れ、別の場所へ奴等を誘導するための移動を開始した。この場で時空移転をすれば、連中はここへ来てから俺を追

うだろう。そうなりゃここら一帯は壊滅だ。
小刻みに同時空内を転移、走るよりは早く、人の目には一瞬の残像だけを残しての移動。こうする事で奴等は俺が向かう場所へ、わき目もふらずに出向いてくれる。人の、居ない場所へ。
向かってるのは付近の山の中腹にある展望台だ。シーズンオフの今なら、たぶん誰も居ない。比較的広く取られた駐車場にも車は一台もないはずだ。
奴等がなぜ、正確に俺の所在を掴めるのかは解からないけど、それが恐ろしく厄介なことだってのだけは解かってるんだ。俺の時空移動は、もはや魔法ですらない。だから、それに付いてくる奴等もまた、魔法以上の力を使って追ってきてるって事なんだ。
恐らくは、刻印の力。

生体反応、いや、普通の生命から感知される類のものじゃない、これは奴等の尖兵。
生体機械反応が複数、どんどん俺に近付いてくる。
魔力を分散してたんじゃ追いつかれるな、索敵を切り、跳躍に集中して目的地へ急いだ。転移スピードを上げる。あの感じだと、巴ではなさそうだ。アイツはもっとトロい。
けど、嫌な予感がする。まさか、新たな刻印所持者か……？
俺が転移速度を上げると、奴等もスピードを上げた。仕方なく、もう一段上げた。それでも新手と思われる敵は、俺のスピードに付いてきた。ちょっと待てよ、この速度は異常だろ。
ついに奴等に追いつかれた。後ろから例の尖兵が数匹、四つん這いの状態で疾走し、俺に追いすがる。まだ住宅街、この世界の人々ならこの異常な光景を目に止められるほどの能力はないが、もし進路上に人が居れば間違いなくミンチだ。俺は転移を使ってるが、連中はフツウに走ってやがるんだからな。並外れた、尋常でない速度だ。ソニックブームで周辺の窓ガラスが粉々に砕けて舞う。民家の塀といわず外壁といわず、奴等が通るところは半壊する。

誰も居ないことを願うしかない、路上駐車していたどこかのバイクが弾き飛ばされて空中分解する様が視界の端に見えた。バケモノどもめ……。

先頭に居る奴に見覚えはない、きっと新たに加わった刻印所持者だ。連中に拉致された者なのか、自分から志願してんのかなんて、そんなのは知らない。連中のことは何も解からない。俺と同い年くらいだとは思うけど、この男は髪の色が金色だ。白人特有の彫りの深い顔。見たこともない奴が、俺だけを視野に留めてまっすぐ突っ込むように走ってくる。いや、低空飛行か。

飛ぶのかよ、刻印か魔法かはそれだけじゃ判別つかないけど。

巴の他に、今追ってきてるコイツみたいな奴が少なくとも5人は居る。俺が見たのが5人ってだけだ、もっと居るかも知れない。とにかく、そいつ等が一人増えたって事だ。巴みたいにグロテスクな機械鎧を纏い、コイツの場合、右目を含んだ頭の一部が機械化されているようだ。嫌な感じがする、まさか、抵抗した時に吹っ飛ばされて、それで機械なのか……？

過去に見た光景がフラッシュバックで戻ってくる。嫌な記憶が。

俺が居た世界で、国の精鋭部隊が瞬く間に殲滅されたあの日の光景。人間がまるで風船でも割るみたいに、弾けて千切れ飛んだんだ。奴等の攻撃を受けて、あっけなく。

此処とは違い、魔法と最新科学が融合したような世界でだ。それが、敗北するなんて。

頭を振る、今は過去を振り返ってる場合じゃない、とにかく場所を変えて。

そして、逃げるんだ。

森の中へ入った、一気に目的地へジャンプ。焼ける痛み、右腕に熱源が掠った。

尖兵たちは口から熱レーザーを撃ち出してくるんだ、めくら滅法

に撃ち放ってきた瞬間に、ジャンプして逃れ、一足先に展望台へ移動した。後は奴等が来てから、この世界を去ればいい。

意味がない事は解かっている。

奴等をほんの少し移動させたところで、別の世界へ移転すればまた暴れるだろう。無駄なことさ。

解かってるけど。

「！！」

人が。

誰も居ないと思っていた展望台には、小さな女の子が佇んでいた。

殺害

「逃げろ！　ここに居たら危険だ！　早く！」
金髪碧眼、きっと外国の女の子だ、日本語が通じるだろうか。黒い洋服はアンティークドールのような感じで、黒いうさぎのぬいぐるみを抱いてる。俺の身振り手振りの言葉にも反応せず、じっとこっちを見てるだけだ。頼む、通じてくれ、奴等が来る！
「逃げろってば！」
背後で木が薙ぎ倒される派手な音が響いた。
「Ａ　ｃａｒｖｅｄ　ｓｅａｌ，……　ａ　ｈｏｌｄｅｒ．　……ｋｉｌｌｅｄ．」
ついに追いつかれた。
くそ、こうなったらユキの時と同じ、抱えて逃げるしかない。
けれど、俺が咄嗟に伸ばした腕は少女をすり抜けた、いや、少女の方が俺の腕を掻い潜って前へ出たんだ。俺の背後の敵の前へ躍り出た。
アンティークドールの少女は、うさぎをぽとりと取り落としたかと思うと、奇妙な動作で腕をまっすぐ前方へ伸ばす。クワガタだ、少女の手の甲に、輝く刻印。クワガタムシのマークだ。
奇妙な紋章を、一目見ただけでなぜその名称まで解かってしまうのか、自分で自分のことがよく解からなくなるんだが、今、目の前にはクワガタの刻印とカクタスの刻印が対峙している。
カクタス、シャコバサボテンの西洋名称だ。刻印の種類は多岐に渡るが、名称における法則性だとかは解からない。昆虫や植物……ユキの刻印なんか幻想生物だ。
少女はカクタスを無視したように勝手に踊る。
伸ばされた二本の腕はクワガタの鋏のような形の楕円の光を生み出した。それを、次々と打ち出していく。正確に、俊敏に。カクタ

スが繰り出す攻撃を避わしながら、少女が舞う。発射された光の環はボス格以外の尖兵たちを捕らえ、絡め獲る。
少女が腕を上下から交差させた。
ベギン、
嫌な音が一斉に響いたかと思う間に、尖兵たちは一匹残らず両断される。
まだ動ける者へ向けて、第二波が襲い掛かる。数分とかからずに、全滅させた。
まるで映画、人外の怪物同士の戦いを傍観するしかない脇役のように、俺は呆然と見ているだけだ。ふわりと、少女が俺の隣へ舞い降りる。
「これはわたし一人じゃ無理。あなた、力を貸しなさい。」
横目でじろりと睨みつけ、少女が俺に命じた。
最後に残ったボス格、カクタスの刻印所持者のことだ。けど、俺にはそんな力……。
「早くなさい、死ぬわよ。」
カクタスの標的が、俺に切り替わった。振り上げた腕の先はカクタスの花のような赤い突起に覆われていて、その腕が振り下ろされる度に数千もの毒針を撃ち出した。
マジック・シールドが効かないことは、巴との戦闘で嫌というほど味わってる！
横っ飛びに、間一髪で避けた俺だが、無様に倒れ伏したところを狙って、カクタスの第二波が。
少女の放った光る環が毒針を粉砕した。
いざとなれば時空転移で逃げられるが、状況が状況だけに戸惑っていたんだ。助かった。
カクタスの刻印所持者は、俺たち二人を交互に見比べていた。無言で。
後ろを振り向けば、俺が避けた第一波がとんでもない威力で地面

を抉り取っている様が見えた。あんなモンに当たったら、それだけでミンチだ。今朝、巴との戦闘で使った時空魔法、次元転移の渦でさえ、刻印による攻撃の前には無効。どういう法則をしてるんだか、魔法を無視して突き抜けてくるんだ。

バケモノ同士が再び戦闘を開始した。少女の放つ環は赤い突起部分で簡単に破壊される。そして敵から撃ち出された毒針も光る環に粉々に……。勝負が着かない。

突然、少女が飛び退った。

「チェンジ！　インソート！」

少女自身が光り輝く。なんだ、何が起きる？

少女だった光る物質が、俺めがけて弧を描き、飛び込んでくる。

衝撃に目を堅く閉じ、即、飛び退った。危険を察知したんだ。敵の攻撃がアスファルトを抉る。

なんて油断のならない奴！

『戦いなさい、意味がないわ。』

少女の声は俺の中から聞こえた。同化したんだ、俺の刻印と彼女の刻印はセットだった。

刻印の中には、稀に、二つがセットとなるものが存在する。そのセットは互いが同化する事によって、他の刻印を上回る能力を得る。どちらかより格の高い刻印所持者が表面へ出て、刻印を吸収するんだ。その力は吸収した所持者の自由になる。クワガタと玉虫、俺の方が上だったんだ。

次から次へと、今まで知らなかった新たな情報が、自身の中へ生まれ出る。まるで最初から知っていたかのような感覚で、さも当然の顔をして知識に加わっている。

『今のあなたなら勝てるわ。』

カクタスのスピードが、遅く感じる。いや、俺の体感が増したんだろう、スピードは互角になった。コイツには無闇に触れちゃいけない、瞬時の判断。肘打ちを繰り出そうとした左を寸で止めた。流

すように身を返し、正面へ。
正解。奴の背中、肘が狙った箇所から毒の棘が突き出した。……サボテン、ね。
余裕が生まれている。身をひねり、攻撃をかわすと同時に、環をかけた。
瞬時の出来事だ、一瞬の動き。
はっ、と気付いた時には、俺の腕は死刑の宣告を終了していた。
ベギン。
機械の部分と生身の肉がないまぜに引きちぎれる音。
「うっ、」
肉片と、血溜まり。細かな機械部品が赤く濡れて……。
真っ二つになった、人間の身体。かすかに動いてる指先……。
殺した……？　俺が、やったのか？
胃の底が、恐怖でせりあがる。よろけた俺は、目の前の光景に、吐いた。

狭間

人を……殺した。

「げ……げぇ、」

『敵を殺したことさえないなんて。呆れた人ね。』

胃の中身なんてほとんどないのに、胃液さえ出ない状態でも吐き気は収まらない。

その場にしゃがみ込んで吐き気と格闘する俺に、同化した少女が冷たい言葉を浴びせかける。

なんだよ……、さも当然みたいなその言い草って、なんなんだよ。狂ってんじゃないのか。頭の中が混乱して、何がなんだかよく解からなくなる。考えることを拒否してる。

「ぐぁっ……！」

かと思えば、とんでもない激痛が背中に走る。

少女が強制的に同化を解いて、光の塊が無理やり俺の中から抜け出す感覚。吐き気さえ飲み込むほどの強烈な痛みに呻く。背骨がベキベキと音を立てて軋んで、激痛が襲う。俺から離れ、隣に佇む光。

光がおさまりつつ、少女の輪郭を取り戻してゆく。

「解除の同意くらい覚えなさい。あなたに付き合ってたら日が暮れるわ。」

荒い息を吐く俺に、少女は冷めた視線を投げて言い放った。

なんなんだよ、このガキ。さっきから黙って聞いてりゃ、好き勝手言いやがって……！

文句の一つも返してやろうと少女を睨んだ。その足元に、輝く模様が現れる。魔方陣の一種だろう。

「トレインが来たわ。連中はもう他の次元へ跳んだようだし、ここの始末はこっちでやる事になるわね。」

少女は顔色一つ変えずにさっき殺した男を見下ろす。

少しのあいだ忘れていたその存在を思い出した途端、また身体が勝手に震え始めた。
俺が……やった、のか。これ。
真っ二つになって、大地に文字通りの血の池を作って、金髪の男はもうピクリとも動くことはない。
気持ちの悪さが、罪の意識にスライドしていく。この場から逃げ出したい衝動を必死に抑えた。
人を、殺してしまった……。
しっかりしろ、俺。いつまでも捉われていたら、動けなくなる……。忘れるんだ、仕方なかったんだから。殺した男を視界から外して、無理やりに気を落ち着けなくてはならないくらい、俺は動揺している。
仕方なかった、そうだ、仕方なかった。殺さなきゃ、殺されたんだから。

魔方陣からの召喚形式で登場したのは、３０代半ばくらいの痩せぎすな男だった。　水面から湧き上がるように、陣の上に降臨した。こいつが、さっき言ってたトレインて奴なのか？
オールバックの髪型に整えた黒髪、顔つきは日本人だと思うけど瞳の色は金色だ。仮面を付けている。映画で観たことがある、あれは、オペラ座の怪人。その銀色の仮面によく似ていた。顔の半分が隠れる。
「これはまた、派手に暴れましたねぇ。で、刻印の回収はまだですか、ではそちらも良いように。」
この男も少女と同じく、まるで罪悪感がない様子だ。死んだ男を見るなりそんな言葉を吐いた。
こいつだけじゃなく、周囲には続々と魔方陣が浮き上がり、その中から次々と人が現れる。それぞれ統一感のまったくない人間たちだ、衣装も見た目の歳もバラバラでちぐはぐな感じがした。
トレイン、と呼びつけながら少女が宣言する。

「引き上げましょう、連中が引き返してきたらコトだわ。」
少女が手をかざす。魔方陣が浮き、さっき殺した男の周囲一帯に広がった。光の粒子がこぼれ、男を別の次元へ転送する。見回せば、現れた人々はそれぞれで、尖兵たちの死骸を同じように消して回っていた。後始末？を、しているのか。

「転送先へ来て。座標は……解かるわよね。」
黙って頷く。元から俺の能力はそれくらいだ。でも、転送されてゆくその地点を割り出して驚いた。
これって、次元の狭間じゃないか。
次元の狭間は、自然の流れで作られたものじゃない。自然に反する力が行使された時に、本来の時空の流れとは違う動きを起こした場合にのみ現れる、いわば人工的な階層世界だ。そのスペースも正規の空間宇宙とは異なり、ごく小さなものでしかない。皺寄せで出来た穴のような空間だからな。
まぁ、穴と一口に言っても、その大きさはピンキリだけど。世界が多数あるように、狭間も多数存在する。
改めて俺の顔を少女がまじまじと見つめてきた。自然、俺も彼女を見返す。
「わたしは貴方を追って来たのよ。貴方が現れたという情報がもたらされる度にその世界へ出向いたの。けれど、貴方には逢えなかった、前触れもなく消えてしまうから。
あなたは異常だわ。普通、次元移動なんて不可能だと考える世界の方が多い上に、可能である世界であっても、とても難しい技術なのよ。たまたま魔法が存在して時空移動が可能であるケースの世界においても、実行には大掛かりな装置と手順が必要なはずなのに……なぜ貴方は、いとも容易く実現出来るの？　世界によっては、不可能を可能にしているのよ？」
それは、『神』の領域だ、と。
少女はそれこそ、俺がさっき少女を見たような目で俺を見つめた。

バケモノを見る目。
そんな風に言われても、俺に解かるわけがない。この力は刻印が与えるものだ、調べるにも、奴等に追われてそれどころじゃなかったんだ。
俺だって自分で自分が怖くなる時がある。この力は、魔法さえ超えているって、そのくらいは解かっているんだ。魔法がない世界に生きてたわけじゃないんだから。魔法の法則さえ越える力だと解かってる。
なんなのかなんて、こっちが聞きたい。

本部

それにしても、この少女はなんなんだ。なんだって、こんなに大人びた口調で話すんだ？

疑問を口にしたわけじゃない。だけど、彼女は気付いたようで、俺に背を向けて歩き出す。そして、ぞんざいな口調で言った。

「とにかくいらっしゃい。詳しいことは向こうで話すわ。」

男が出てきた魔方陣、仮面の男はその場からまったく動いていなくて、少女は男の傍へ歩み寄る。招き寄せるような手振りで、男の腕が少女の肩を支え……来た時と同じに消えてしまった。

仕事を終えた一味と思しき連中が、俺の様子をじっと見ていたが、一人、また一人と、同じように去っていく。最後には、俺一人が残された。

ここでついさっき、激しい戦闘が繰り広げられただなんて信じられないくらい、何の痕跡もない。すべて跡形も無く消し去ってしまったらしい。無人の展望台駐車場、だ。

どうする……、迷いはするが、とにかく行ってみるしかない。連中は、きっと俺の知らない情報を多く持っているはずだ。奴等のこと、この刻印のこと。なにより、奴等に対抗するための手段を持ってる。

飛翔準備にかかる。時空螺旋展開、サーチ。

少女の足跡を辿った。

捕捉した座標の位置には規模の大きな狭間があった。

どういう事情なのかは解からないが、どこかの世界の団地がまるごとその空間に納まっている。まるで、なにかの拍子に切り取られてしまったかのようだ。怪談話で聞く幽霊団地そのものって感じか。

狭間での時間の流れは場所によってまちまちだ。逆行している場所、超スピードで流れる場所、時が止まっている場所。索敵の結果、

団地のリズムは通常より緩やかに秒針を刻んでいると知った。
普通に人が暮らしている。玄関先を掃除してる若い女性に、干した布団を叩いている中年の女性。とりあえず、人の居ないどこかの棟の階段にワープアウトした。
あの時の少女を探さなくちゃいけない。索敵魔法は役に立たない、人が多過ぎる。もっと上級の魔法も習得しとくんだった、初級の索敵では個人の特定までは出来ないんだ。
階段を降りようとする俺とすれ違ったどこかの奥さんが、その時、急に声をかけてきたんだ。

「あなた、緋人くんね？　ここで何をしてるの、トレインさんが待ってるわよ。」
いきなり親しげに話しかけられて、俺は戸惑うばかりだ。見知らぬ団地の若奥さんって感じだが、なんで相手は俺を知ってるんだ？
ここへは今初めて来たんだぞ。
そういえば、さっきの連中も俺のことを知っている風な態度だったけど……。
「ここはＡ－３号棟よ、トレインさんはＡ－１号棟の３階に居るわ。３階全部が本部だから、行けばすぐに解かるから。」
俺の反応を気にも止めずに女性は喋り続ける。
「あ、そうそう、喉渇いてない？　これ、さっき配給で貰ったの、あげるわ。これしかないのよー。選んで貰えなくて悪いんだけど、缶コーヒー、大丈夫よね？」
言いながら、彼女は腕に抱えた買い物袋から何かを探り出す。
一気にまくし立てて、俺の手に冷えた缶ジュースを握らせると、女性は俺の身体を半ひねりして背中を押した。早く行け、というジェスチャーと共に送り出される。
「１号棟はあっちよ、メリーちゃんがイライラして待ってると思うから早めに行ってあげてね。」
仕方なく動き出した俺に、若奥さんが手を振った。移動地点を調

整して、ジャンプ。
なんだか拍子抜け、というか、調子が狂う場所だな。
団地の三階フロア全部が本部だと聞いたけど、見たところは何の変哲もない外観だ。他の棟となにも代わり映えがないような気もするけど、どうなんだろうか。同じような造り、同じ玄関ドア。
すぐ傍のドアが開いて、男性が一人、中から出てきた。俺に気付いて、はっとした表情だ。
中に向かって何か言ったけど、早口で解からなかった。
「緋人くんだね、待ってたよ。どうぞ、どうぞ、中へ入って。わたしゃこれから出掛けるんで、案内は出来ないけど、後のことは中の人に適当に聞いて。」
さっきと同じに背を押されて、俺は玄関を潜らされた。なんか、ここの住民はやたらと強引だな。
一歩中へ入ると、さすがに驚かされる。外と中ではまるで別モノだった。どこかの軍事基地かと思うようなハイテク機材に囲まれたこの空間は、外側の団地の風景とはまったく釣り合わない。この設備は、俺が元々居た世界の最新鋭にも匹敵するだろう。魔法に関わる科学の創り出した機器だと、一目で解かる。
ここの人々は、俺と同じ、魔法が存在する世界の住民なのか？

「トレインさん、緋人くんが着きました！」
視線の先に、あの時の仮面の男。その隣にはアンティークドールの少女が居た。魔法科学の精密機器、その計器のパネルが暗い空間に色とりどりの光を投げかけている。中央辺りに人が機械を制御するスペースらしき場所があり、そこのスロープ付近のソファで二人は寛いでいた。数名が忙しそうに立ち働いている傍で、暢気にお茶を飲んでいるらしい。
紅茶かなにかのカップを両手で持ち、一口啜って少女が俺を見る。
「遅かったのね。どこをうろうろしていたの？」

いちいち棘のある言い回しだ。間違いなくあの時の少女だな。くそ。

「とりあえず、こちらへどうぞ。」

仮面男の手招きに応じて、俺は彼らの元へ歩いていった。

本部（後書き）

お題クリア：ＶＳ団地妻

不死

「まずは自己紹介から始めましょうかね。もうご存知かと思いますが、わたしはトレイン。この団地の永久管理人を勤めております。」

聞きなれない単語に興味を示した俺に、仮面男は意地の悪い笑みを浮かべた。

「永久管理……。そうです、わたしは不死の人間です。アンデッド、と言ったほうが馴染みがありますかね？」

言われて、素直に驚いた。死人だと言われて、即、信じられるようなものでもないが、少なくとも死んでるようには見えない。普通に生きた人間だとしか思えない。死者を使役する系統の魔法は、俺の居た世界にも存在したから、今さら混乱することもないけど。

信用してないのを見透かしたか、奴は少しだけ肩を竦めて先を続けた。

「この仮面の下をお見せすれば納得されますよ。」

そして、仮面を取る。その下にあったのは、骸骨だ。

思わず後ずさった俺に、再び男は肩を竦めて言う。「正直なことで。」……バツが悪い。

「どうでもいいのよ、そんなコト。ここには色んな人間が居るんだから、早く慣れなさい。」

少女の一言にカチンと来た。どこまでも高飛車だな、このガキ。

「なぁに、その目？　人を見た目で判断しないことよ。わたしは貴方より相当の年長者よ。敬うべきだわ。」

「わたしはアンデッドだと申し上げましたがね……。」意味深な物言い。「彼女も同種です、アンデッド……吸血鬼です。」

な、

思わず、二人から跳び退ってしまった。

「本当に正直な方で。」

くすくすと笑う不死の男が、三度び肩を竦めた。

「メリー・レティシア・ボードレインよ。１８２４年に生まれたから、さほど古い吸血鬼ではないわ。」
世間では産業革命だとかでとても活気付いていた時期ね、と、少女の姿をした魔物が言った。
俺が渡ってきた世界の中には、他方では想像の産物とされる生物が実際に生きて闊歩しているような世界も確かにあって、人間の想像力の根源は結局、あの無限の螺旋構造に収納されている現実なのだと妙な納得をしたものだったが、こんな風に、実際、彼らが存在しないはずの文化の中に紛れていると、違和感の方も半端ないものがある。
けれど、実際に魔法のない世界に住む者は俺の存在が信じられないだろう、時空の壁の向こう側という概念すら不確かなはずだから。だから、平行する幾多の世界は交じり合わない。本来なら。
それより、彼女のことはなんと呼ぶべきなんだろう。まさか、そんな陳腐な名称でいいとは思わないけど。
恐る恐る、確認を取るように俺は問いかけた。
「メリーさん？」
「レティシアよ、その名で呼ばないで。」
やっぱりか。
彼女はひどく不機嫌な顔をして、俺を睨んだ。
「すいません、彼女は気難しいところがあるのです。」
こっちはよほどに悪趣味だ、俺たちのやり取りを見物してやがった。
笑いを噛み殺してやがる。
「ようこそ、緋人くん。いや、『時空旅行者（ディメンション・トリッパー）』……幾多ある刻印の中で最高の能力を持つ者。貴方とコンタクトを取ることが、我々の当面かつ最優先課題でした。ようやく、現状を打破し得る刻印所持者と巡り合えました。」

どういう意味だ？　俺を探していたとかいう話は聞いてたけど、それってこの少女、メリーと同調する事が出来るペアの刻印だからって事だと思ってた。
今なら解かるんだ、刻印は多くがソロで力を発揮する物が多くて、俺とメリーのように対になった物は数が極端に少ないんだと。それは上位種というべきもので、同調すればソロの刻印の力を大きく上回る。
それで探していたんだとばかりに思ってたけど、違うらしい。
「貴方がこの戦いに終止符を打つことになるかも知れません。」
わけが解からずうろたえている俺に、メリー……レティシア、が言葉を添える。
なんだか怒った口調なのは、俺が内心で彼女をメリーと呼んだからだろうか。
「トレイン、それは無駄だと何度も言ったはずよ。仮に、緋人が敵の正体を知っていたとして、過去の時点に戻って敵を叩けばそれで終了なんていう話なら、とっくに解決しているはずだもの。」
「ですから、その可能性を直接彼に問い質すためにも、コンタクトを取る必要があったわけじゃないですか。レティシア。貴女は納得しているかも知れないが、多くの者はそこに希望も見出しているのですからね、無視は出来ません。」
ああ、つまり、過去に戻って未来の訂正が出来るんじゃないかと……そう思ってる一派が居るわけだな、彼らの組織内に。タイムトラベルが可能なら、誰でも考えることだ。
だけど、答えだけを述べると、ＮＯだ。そんな虫のいい話はない。
「過去へ、何名かの刺客を送ったのですよ。敵の大元を叩くためにね。いずれも戻りませんでしたし、原状も変化はありません、失敗に終わったのです。ことごとく、敵の放った防衛手に破れ去りました。」
そりゃそうだろう、普通は時空移動といえば大掛かりだ。その間

に、敵だって同じ準備が出来る、過去と未来でループするだけだ。
……と、一見はそう見えるんだろうな。実際は違うけど。
「考えることなんて、誰でも同じだわ。つまりね、緋人。貴方なら、瞬時に時を移動する事で防衛手の裏を掻くことが出来るんじゃないか、って意味なのよ。……くだらないわ。
もしそうなら、緋人はとっくに自身の過去を変えているに決まっているじゃない。」
レティシア、吸血鬼の少女はさすがに長く生きてるだけあって、理屈をよく心得てるらしい。実際に見たわけでもないのに、核心に近いところを抉ってる。
うまく説明出来る自信はないが……仕方ない、淡い期待を打ち砕いて申し訳ないけどな。

要塞

「敵の大元ってのが大魔王だか大魔神だかは知らないけど、過去に戻ってそれを倒すなんてのは、今回に限っては無駄な話だ。敵も時空を行き来するんだからな。」

その意味の重大さに気付けってのは、さすがに無理があるだろう。

俺はさらに続けて喋る、出来るだけ混乱させないようにしないとな。あれは、説明が難しい。

「時空の成り立ちそのものが見えてないと誤解が生じるんだが、この世界は一つじゃない。それはもう解かってて話してるんだよな？」

二人が頷く。平行する宇宙の構造模型が頭に入ってないと、到底理解出来はしない。

「宇宙は複雑な多面体で、無限に近い平行する面を抱えている。それらは時間という軸で繋ぎ留められていて、数珠繋ぎになってると思ってくれていい。同じ時間のよく似た景色は無限の数が繋がっている。

……人間に置き換える、俺がどれだけ時間と空間を行き来しても、俺に流れる時間は常に一定に流れている。重ねられた布の山を、一本の針と糸でめちゃくちゃに縫っている、それが俺という存在だよ。途中、どの地点で何をやったとしても、分岐の一つを選んだだけで、元々の宇宙には何の変化もない。」

過去に戻って何をしようが、分岐した可能性の他の道を選び直しただけ、もともとの分岐はそのまま存在し続ける。俺に関わる時間軸の糸が二度縫いした軌跡を残していくだけだ。

過去も、未来も、今、現在のこの一瞬すら、誰にも変えることなど出来はしないんだ。

時空螺旋の全体図は、そのまま、確定された運命の姿だ。誰にも逃れる術はない。無限の選択肢と、無限の結末と、無限の選び取られる宇宙が存在するだけだ。

過去に戻り敵を倒しても、別の分岐に流れ込むだけだ。殺すことに成功した宇宙へスライドするだけ、元もとの世界の歴史はなに一つ変わらないから、その未来も変わらない。いや、殺すことに成功するという選択肢自体も、元から含まれている。そこに自分が居ないだけ、別の自分が居るだけのことだ。そして、時空を越える敵には、分岐自体が意味を持たない。

確定、だ。時空螺旋は、最初からすべての選択肢が確定して存在するんだ。始まりから終りまで。

俺の説明で、どうにか二人は理解が為ったようだ。どちらともなく、重いため息を吐く。

ただ一つだけ、この刻印に関しては勝手が違う部分もある。

「もう一つ、言っておかなきゃいけない。」

二人が俺に注視する。

「俺は過去を変えようとした事があった。でも、変えたはずの分岐の先、その世界に居る俺には刻印がなかった。刻印を持つ俺という存在は、ここに居る、この俺、たった独りだ。」

この刻印は、魔法の法則すら超える。魔法の法則が従う、この宇宙の大前提となる法則よりも上だという事だ。だから、たぶん、どの刻印も、すべての平行世界を合わせた中でも一つきりしか存在しない。

「確か、あんた達は刻印を回収するとか言ってたよな？　もし、敵も刻印を集めていて、あんた達も集めているんだとしたら……その刻印は、それぞれ一つずつしかないって事は確かだ。」

すべての世界に俺は居る。すべての世界、それぞれの俺は、それぞれが別モノだから。その全員を漏れなく調べたわけじゃない。でも、解かるんだ、刻印持ちはそれぞれ独りしか居ない。

レティシアも俺と同じ刻印所持者のはず、だけど、彼女はその事実を知らないらしい。だから、俺に聞かされた話で、語尾を強めて

言った。
「だから言ったでしょう、トレイン。急がなくちゃならないわ、連中の目的を阻止しきれなくなる。」
俺が知らない彼らなりの事情というものがあるらしい。仮面の死者は、黙ってまた肩を竦める。
話が他へ移る前に、聞いておくべき事は聞かなくちゃな。
「俺が話せることはあらかた喋った。今度はこっちの番だよな、教えてくれ。あいつ等は、なんだ？」
そう、俺が聞きたいのは、それだ。

「そうね、まずはそこから始めるべきだったわね。」
吸血鬼の少女は、一息つくかのように紅茶を啜る。カップの中身は透明な紅い液体だった。
「そういえば、吸血鬼とかいう割にはよく平気で昼日中に出歩いてられたな、太陽は苦手だと思ってたけど……」
俺の居た世界に吸血鬼は存在しない、でも、万国共通でそのイメージは確定したものだと思ってた。そして、弱点も。太陽光で灰になるというのは、普遍的なものだと思ってたけど。
「ふふ。刻印のお陰……とでも、しておきましょう。」
意味深な台詞で誤魔化された。
もしかしたら、彼女の世界でいう吸血鬼ってのは、弱点など存在しない恐ろしい怪物で、人間には対抗する術がないとか、そういう事なのかも知れない。そんな世界があっても不思議じゃない。
あらゆる可能性は現実として螺旋の宇宙に格納されているから。
彼女の言葉を待った。
「わたしが彼らに遭ったのは三年前よ。彼らが今の形を形成したのは十年前くらいじゃないかしら。その当時には既に彼らの本拠は時間と空間の狭間に存在する要塞の形式を取っていたわね。どういう理屈が通っているのかは解からない、でも、異次元としか言いようのない場所に彼らは本拠地を構えている。」

謳うような口調で、その後に続けて仮面の男、トレインが続けた。
「時空の繋ぎ目に存在する、彼の都市は、重機甲要塞グランドサザンクロス。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3258v/

A dimension tripper.（最強刻印パイルバンカー）

2011年9月30日03時17分発行